88140113

International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

JAPANESE A: LITERATURE – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A : LITTÉRATURE – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A: LITERATURA – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Monday 10 November 2014 (morning)
Lundi 10 novembre 2014 (matin)
Lunes 10 de noviembre de 2014 (mañana)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a literary commentary on one passage only.
- The maximum mark for this examination paper is *[20 marks]*.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire littéraire sur un seul des passages.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d'examen est *[20 points]*.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario literario sobre un solo pasaje.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es *[20 puntos]*.

© International Baccalaureate Organization 2014

https://xtremepape.rs/

次の文章と詩のうちどちらか**一つ**を選んでコメンタリー（解説文）を書きなさい。

1.

山々は、紅葉の時期を過ぎて、冬枯れが始まりかけていた。ひ弱な葉はすでに落ちつくし、疎(まば)らに残っている葉にも夏の濃い艶は見られない。山から山へ、土の大きな起伏のままにうねりながら息づく植物群は、全体がくすんだ色に変わり、日々、沈みこんでいくように見えた。だが、陽が射すと、眠っていただけで病んでいるのではないとでもいうように、まるで土の奥から光を吸い集めたとしか思えない静かな力強さで、山全体が内から鋭く光を放ち、輝きだす。大気に光がこもり、枯れかけた葉の一枚一枚、小枝の一本一本が光りだす。光の粒子は微塵に散って、空中に浮遊し、いつまでも光りやまない。夏の光と違い、少しもまぶしくなく、熱もないのが不思議なほど、明るい。どこまでも遠く透けて見え、不安を覚えるような明るさである。

椎葉幹央は、「松の家」という、四方を山に囲まれた小さな旅館の、二階の窓から外を眺めていた。これでもう四日も同じ風景を眺め続けている。我を忘れて眺め入るほどの絶景とは言えないが、彼としては、生まれて初めての大金を投じた長期滞在なので、そのぜいたくに見合うほどの素晴らしさを、眼の届く限り続く山々に認めたいのだった。

手の届きそうな近くも山、視野のとぎれる遠くも山。山の向こうには何もない、と四日目になってようやくそう自分に思わせることに成功したような心地がしていた。道が消え、街も人も消えてしまったのだから、彼にはもはや、もとの騒々しい住居へ帰る方法がない。その住居ももうどこにもない、と。

しかし、そのかわりに、見える限りの山々が、俺のものになったのだ、と。

慣れぬ場所へ来て、慣れぬ生活を四日続けて、彼は、四日前まで続けていた生活の手応えとそのリズムとを、早くも実感できなくなりつつある自分に、あてどなさを感じている。神経が、陰にこもったようなくつろぎ方をしている、と思う。この風景に俺は満ち足りている、と頷きながら、そのわざとらしさと本音の混じり方の奇妙さが、言うに言われない不思議な満足感を与えてくれる。

彼は、陽のなかで、自分の体やシャツまでが光っているのを感じていた。少しずつ、人間でなくなってくるような気がする。皮膚が緑色を帯び、炭酸ガスを吸いこんで、酸素を吐きだしているような、錯覚を起こしかける。

反対に、山々は、土と岩のかたまりであるのをやめて、光を吸うたびに酸素呼吸をし始め、動物めいたにおいを放ち、ふくらんだり、へこんだりしているように見えてくる。

植物群は、硬く鎮まって、鉱物質の光沢を葉表や幹の樹皮に溜め、じっと動かず、まるで金属のようだ。

彼は、自ら創りだした錯覚を、いつまで眼が覚めずに持ちこたえることができるかどうかの、実験をしているかのように、一日中、眼に見えるものをくまなく眺め暮らしている。

https://xtremepape.rs/

室内に一匹の蟻（あり）がいる。たかが蟻一匹、などとは言えない。世界中の生き物が消滅して、自分と一匹の蟻だけが生き残ったとしたら、誰だって蟻を無視することはできないはずだ。

彼は、外の景色を見ない時には、その蟻を見ている。これまでろくに蟻を観察したことさえなかった、と呆れながら。

彼が知っていたのは、蟻という名の小さな虫がこの世にはいて、時に行列など作ったり、甘いものにたかったりする、という程度のものだ。にもかかわらず蟻と言えばこの世の中で最もありふれた、どこにでもいる虫なのである。しかも農学部の学生である彼ですら、子供の頃に蟻の行列の行方を見守ったその知識以上のものは何も増えていない。

彼は、山を見るのと同じくらいの思い入れをもって、蟻の行方を眼で追う。

第一、蟻という名称など、蟻は知らないだろう。小さな虫、というのも、蟻にとっては不当な表現だろう。蟻は小さくない。蟻は、ちゃんと、蟻の大きさを持っている。人間が蟻に対して何の知識を持たなくても、蟻は蟻の生活をしている。人間は、蟻のことを知ろうと野次馬根性を出してヒマつぶしするが、蟻はよけいなことはしないで、蟻の暮らしに没頭している。

人間である彼は、山を眺めたり、蟻を眺めたりして時を忘れ、そればかりか、そういう虚空の生活に充実感を覚え、その一方で、植物や蟻の純粋な生活に憧れているのだ。

山や木や虫を好きな人間は、善人とされる。

まさか蟻や植物の世界で、人間を好きな蟻や植物が仲間たちのなかで評判がいいということはあるまい。

というようなことを、椎葉幹央は、ふだんは考えてみたこともないが、山へ来てからは一日中ぼんやりと考えている。雲の流れ、風の強弱、そして陽のかげろいや、蟻の絶えず這い続ける姿、葉のそよぎ、などを見ていると、動き続ける自然が彼の体にもしみこんできて、体は動かなくとも頭のなかのものが流れていく感じに浸される。とりとめなく思いが流れてゆくのは、心地よかった。

（増田みず子『シングル・セル』一九八六年）

Turn over / Tournez la page / Véase al dorso

https://xtremepaper.rs/

2.

川

なぜ　さかのぼれないか
なぜ　低い方へと行くほかはないか
今日も
川はその川底をえぐり
その岸辺をけずる
川は　川でなくなることを願う
この情熱の　不条理はいつも美しい

しかし
もっと美しいのは　その隠された苦しみだ
鋸(ひ)き割ろうとして　ついに
右と左に　お前が鋸き割れなかったものは何か
「それは　大地でさえなかった！」
いつでも
わたしはそれを考えている
考えながら
同じく苦しい者として　お前をよこぎる
お前が流れをくだるとき
必死に写した　空を見る
雲を見る　鳥を見る
お前が流れをくだるとき
必死に育てた　渦を見る
淵を見る　魚を見る
その空が　何であれ
その魚が　何であれ
お前の問われているものを
わたしは　わたしの挫折のなかでになう
わたしの　胸の岩のなかでになう

（髙野喜久雄『存在』一九六一年）

https://xtremepaper.rs/